
アルは今日も旅をする

建野海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルは今日も旅をする

【Nコード】

N9695Z

【作者名】

建野海

【あらすじ】

東の武の国 ジャン

西の剣の国 フラム

南の知の国 トリア

そしてそれら三国に囲まれ、貿易国として栄えるセントール

何でも屋としてセントールに滞在する旅人フィードと彼の奴隷アル様々な依頼をこなす中で彼らに訪れる出逢い、別れ、経験、そして成長。

「マスターは駄目駄目マスターですね。私がいっかりしないと」「んな事言うなって。お前の面倒見てるの俺なんだから」
時にほのぼの、時にシリアスなバトルあり。
彼らの騒がしい日々は今日も続く。

始まりの回想

始まりはそう、シンと静まり返った夜の事だった。

冷たく、人気のない地下牢に閉じ込められてもう何時間が経ったのだろう。一度も人が来ていないから、一体今が朝なのか昼なのかもわからない。

さつきからお腹は鳴り続けているけど、そんなことは今までいくらでもあったから気にしない。そもそも、今こんな風になってしまったのも、元を辿ればこの空腹に耐えきれなかった自分がいけないのだ。

叔母からの嫌がらせに耐えて、お腹が減るのを我慢して、露天に置いてあった果物なんて盗らなければ、こうして惨めに奴隷になんてなる事はなかったのに。

暗闇に慣れた目で左肩を見ると、そこには奴隷の証である烙印の紋章がくつきりと刻まれていた。簡易魔法で刻まれた契約の証、人以下である存在の紋章が。

罪を犯した自分を叔母は喜んで引き渡した。そして、売りに出された私はその容姿の珍しさからあっさりと言裕層の人間に買われる事になった。

そこまではよかった。そう、そこまでは。

案の定というべきか、私の容姿の珍しいのを他の富裕層に自慢したかったのか、私を買った少し小太りな男は私に首に繋がれた鎖を

引いて私を引き連れ回した。周りの人々は私を見るなり、

「ほう、これは珍しい。一体どこで手に入れたので？」

「いやいや、立派な買い物をなさりましたね。この者はおいくらでなら譲っていただけますかな？」

「あなたもまた変わった趣味をしていらっしやる。見たところまだ十かそこらの少女ではありませんか。そのような趣味をしていらっしやるとは知りませんでしたな」

などと、私をじろじろと見つめ、奇異なものを見るかのように接した。その中に一つも好印象なものは見られなかった。

私はこの姿に誇りを持っていた。死んだ母が私に残してくれたのがこの容姿だったから、たとえ人とは違って、その事を卑下したことは一度もなかった。

だけど、それでも。見せ物になるのだけは嫌だった。母から譲り受けたこの姿がこんな風にして晒されるのだけは我慢ならなかった。

だから、この時になって私は自分を掴んでいる男に向かって体当たりをした。

結果は惨敗。男はよろめいただけで、自分に向かって反抗的な態度を取った私に、正確には私の烙印に命じて私を地に這いつくばらせた。

「この、奴隷風情が。そんなナリでも買ってやったというのに、この私に楯突くなんて……。せっかく話の種ができたと思ったが、こ

んな反抗的な奴隷では仕方ない。すぐにも売りに出すとしよう。
おい！ 誰かこいつを地下牢に閉じ込めておけ。明日には市の売りに出すから傷はつけるなよ！」

そう言つて男に付き従っている数名が私を捕らえて地下牢に閉じ込めた。

そして、それから地下牢の扉が開く事はなかった。

さっきの話を聞くと、私はまた売りに出されるらしい。またあの壇上に上がらされて買ひ手の奇異なものを見る視線に晒されるかと思つと気が沈んで仕方がなかった。

せめて次に買う人はもう少しまともな人であつてほしい。そんなことを考えて身体を丸めて顔を伏せたときだった。

ゴゴゴツ……ガタン

地下牢への扉が開く音が聞こえ、ゆらゆらと揺れる蠟燭の明かりが部屋の奥にある階段の上に見えた。

もしかして、いつの間にか朝になっていたのだろうか？

コツ、コツと石段を歩く音が周りに反響する。そして、しばらくして灯りとともに現れたのは一人の若い青年だった。

「あれ？ こんなところに女の子が閉じ込められてるなんて聞いてないぞ」

と一人呟いた。そして私の事をじつと見つめた。

こいつも他の人間と同じか。みんな私のことをじろじろモノみたいに見て、何が楽しいんだろう？

そう思っていると、

「なあ、お前ここから出たいか？」

と、男が思ってもいない事を言い出した。

「べつに俺はどっちでもいいんだ。まあ、出たかったら面倒見てやるから早く出る。出たくないならそのままここにいろ」

一体何を言っているんだろう？ 私はこの男の言ってる事が理解できなかった。

「ここを出たとしても、どうせ殺されます。だったら私はここに残っています。どうせ……どこに行っても同じですから」

「ふ〜ん。だったら、ここを出ても安全って言ったらどうする？ お前は好きにしていって言われたらどうする？」

「それは……」

問いかけられて私は答えに困った。今まで言われた事をやるだけの生活だったから、自分でどうすればいいかだなんてことは考えた事がなかった。

でも、ここから出て自由になったとして一体自分はなにがしたいのだろうか？ 結局は変わらずに嫌な視線を向けられるのがオチだろう。

それならば、どこか遠く、自分が安心して過ごせるような場所に行ってみたい。

「どこか、遠く。私がいても変に思われない場所に行ってみたい」

そう男に伝えた瞬間。目の前にあった鉄格子の扉が強引にこじ開けられた。

「そっか。じゃあ、俺と行こうか」

男の馬鹿力に驚く間もなく、手を引かれ、勢いよく階段を駆け上る。

灯りのある場所になると、鉄格子をこじ開けた音が地下から上に漏れていたのか、騒ぎに気がついた人々の走り回る足音が少し遠くから聞こえた。

「マズっ！ ちょっと派手にやりすぎたなあ」

マズいといいながらちっとも不安そうな表情を見せない男をどこか不思議に感じながら見上げていると、私の視線に気がついた男が

「ん？ なんだ、不安なのか。安心しろって、俺がなんとかしてやるから」

「べ、べつに不安に思っていないです。言いがかりはよしてください」

私の反論が可笑しいのか、男は笑って私の頭を軽く叩いた。明るい場所に出て私の容姿ははっきり見えるようになってくるのに男は何も言わなかった。

「あ、あの。なんで何も言わないんですか。その……」

灯りに照らされてはつきりと見える白髪に赤眼。これこそが私が奴隷として小太りな男に買われた理由だった。

「いや、べつに姿なんて人それぞれだろ？ 多少驚いたけど、それくらいで変に思う要素はないしな」

「そ、そうなんですか……」

今まで出会った事のある人とはまったく違う反応に私は戸惑ってしまう。

「ああ。そんなんで驚いているようなら俺の秘密なんてもっとすごいぞ。聞いて驚け。実は俺はな……不老なんだ」

それを聞いて私はこの男は頭がおかしいのだと思う事にした。勝手に出てきて勝手に助けて、私が今まで散々蔑まれて奇異の視線に晒されてきたこの容姿についても何も言わないで、拳げ句の果てには自分は不老だという。これをおかしいと思わないでどう思えばいいのだろう。

「ま、普通は信じねーわな。　　っと、そろそろ向こうも来るな。俺からあんまり離れないようにして付けてこいよ」

そう言っつて男は私の前に出た。私はこの時そのままここに残るといふ選択肢もまだ残っていたのに、気づけばいつの間にか男の背を追っていた。

これが、私と旅人フィードの最初の出逢いだった。

酒場にて

この世界、名の付けられていないこの世界には一つの大陸が存在する。

大陸は大きくわけて四つの国が存在し、

東の武の国 ジャン

西の剣の国 フラム

南の知の国 トリア

ジャンは武芸に優れた国。武術や気を扱う人々、それらを学ぶ人で溢れている。

フラムは剣技に優れた国。勇猛果敢な騎士たちが今日も人々を守っている。

トリアは魔術に優れた国。魔術に関する蔵書や、魔術の最先端である学院、魔術を研究するために訪れる人々も多い。

そして、それら三国に囲まれ貿易国として栄えるのはセントール。各国の情報や特産物などが入り交じり、どの国よりも賑わい人が行き交う国だ。

一見すると他の三国に比べて武力に劣ると思われるこの国だが、各国から亡命するものが多く、彼らが集まって作った組織があるため、簡単には侵略される心配はない。

そのためか、なんらかの理由で国を追われた亡命者が次々とこの国に流れてきたため、この国は亡益国と揶揄される事もある。

物語は、そんなセントールの西側、剣の国フラムに近い小さな下

町から始まる。

「おいオツサン！　なんか仕事紹介してくれ」

下町にある酒場の扉を勢いよく開いて一人の青年が中へと入ってきた。まだ日も昇りきっていないこの時間帯では酒場にいる人もまばらであり、彼が勢いよく登場してきても誰も大きな反応を示しはしない。

初めて彼を見た者は何事かと一瞬驚き、しかしたいした事ではないと彼の言葉と雰囲気からすぐさま察し、食べかけていたパンに再び手を伸ばす。

この酒場の馴染みの者は最近ここによく顔を出すようになった青年の毎度の行動に呆れ、ため息を吐き、そして店主に同情の眼差しを向ける。

「おい、今うちは営業中だ。仕事が欲しけりや食事の一つや二つ頼んでからにしてもらおうか」

顔全体に深く生えた髭に、強面で体格のいい、暗い路地裏で一般人が出会った日には腰を抜かしてしまいそうな風貌をした中年の男性がカウンターの途中で木製のグラスを拭いていた。

「そんな堅いこと言わないで紹介してくれよ。俺を路頭に迷わすつもりかよ」

愚痴をこぼしながら、青年はカウンターの一席に座った。

「そうだぜ、レオード。さっさとそいつに仕事でもなんでも紹介し

て撮み出しちまえ！　こう毎日毎日入り浸られたんじゃ、せつかくの酒がまずくなつて仕方がねえ」

馴染みの客の一人がテーブル席から冗談混じりに文句を言う。

「うるせえ！　おめえだつてこんな日中からろくに働きもしねえでうちに入り浸つてるじゃねえか。おめえとこいつに違いがあるならうちに金を払つてるか払つてないかの違いくらいだ」

すかさずカウンターの中からレオードが言い返した。その言葉に他の馴染みの客は「まちがいねえ」と頷いた。もつとも、頷いた彼らも結局のところ同類なのだという事に気がついていないのだが。

「そんじゃ、俺もここに寄付をしますかね。いつも仕事紹介してもらつてるし。オッサン、俺アップルパイとラム酒ね」

「このガキ。頼むと言つておいてそいつはうちで一番安い料理とドリンクじゃねーか。どうせだつたらもつと高いもん頼みやがれ！」

「え〜。だつてオッサンの料理つてそんな上手くないし、せつかく高い金を支払つていいもの頼んで、黒こげになつたもんを食わされちやたまつたもんじゃないからね」

青年の一言にまたしても酒場に笑い声が響き渡る。「そりゃあそつだ」とか「おめえの負けだレオード」と言つた野次が飛び交う。

「くっ……言わせておけば、好き放題言いやがつて。おい、フィード！　俺は昔傭兵ギルドでも名の通つた腕利きの傭兵だつたんだ。あんまし馬鹿にしていると痛い目を見る事になるぞ」

フィードと呼ばれた青年はレオードの脅し文句に、

「みんな聞いたか？ ついに出たぞオッサンの謳い文句、傭兵レオード。一体それで今まで何人の女を口説いて相手にされなかった事やら」

その言葉にまたしてもドツとひときわ高い笑い声が上がった。ある者はテーブルをドンドンと勢いよく叩き、ある者は「また始まったよ」とレオードのいつものやりとりに呆れかえる。

この酒場の店主、レオード。彼が言うには彼は昔有名な傭兵ギルドで名のある傭兵だったらしい。その名を聞けば、誰もが恐れかえって彼に道を譲ったし、その任務成功率は相当な高確率だったようだ。実際、彼の身体には剣で切り刻まれたような痕や、魔法によって傷つけられたような痕もあるので信憑性は高いのだが、なにぶんこんな下町の酒場でそんなことを言っても、相手は酔っぱらいばかり。まともに話を取り合うわけもなく、みんなほらを吹いているのか、さもなければ妄想だと切って捨てていた。

もつとも、彼自身いつからここにいるのか知っている人は少ないし、実際体格の良さから一部の人間は実は本当じゃないのだろうかかと疑っている。

しかし、彼が戦っている姿など誰も見た事がないので、結局冗談だとしてみんな扱う事になっているのだった。

「お前たち……今日は閉店だ！ おめえらもこんなところで油売ってないでとつとと仕事にでも行ってきやがれ！」

レオードは怒声とともに木樽を酒場の中央へ放り投げた。

さすがにマズいと思ったのか、怒りの矛先を自分に向けられたくないと思ひ、酒場にいた人々は代金だけ置いてそそくさと外へ出て行ってしまった。

ただ一人フィードを残して。

「ほら、これで仕事もなくなった。早いとこ俺に仕事を紹介してくれ」

レオードの怒りもなんのその。気にした様子を一切見せず、フィードはいつもの調子で話を続けた。

いつものことながら、相手のペースに乗せられたことによつやく気がついたレオードは沸き上がる怒りを抑えて、しづしづフィードの要求を飲むことにした。

「まったく、お前が来るとうちは商売上がったりだ。頼むから二度とこないでくれ」

「そんなこといって、俺が来たときはみんな盛り上がっているじゃないか」

「お前が余計な事ばかり言うからだ！」

カウンターの奥から何枚かの羊皮紙を持ってきたレオードはフィードの目の前に勢いよくそれを叩き付けた。

「ほら、お前が欲しがっている仕事だ。どれでもいいから好きなものを選べ！ なんなら全部やってもいいんだぞ」

「いや、そこまで欲しいと思っていないから。どれどれ……」

目の前に置かれた羊皮紙に書かれた内容をフィードはじっと見つめた。そこには下町に関する事件や人手の足りない作業の手伝いに関する内容が書かれていた。

「なになに？ 中階層の建築の手伝い。土木作業じゃねえかこれ。嫌だよあんな男臭いところにいくなんて」

「仕事を紹介してもらってる立場で文句を言うんじゃないやねえ。だいたいお前なんでこんな風に仕事紹介してもらうなんていう形式をとってるんだ？ そこらにいけば仕事なんて溢れるほどあるだろうが」

「うーん。べつにそうしてもいいんだけど、なるべくみんなの手に負えなくて困ってそうな任務をこなしたいし。せつかく自分にできる事があるならできるやつがそれをやるべきだとは思わない？」

「まあ、そりゃあそうだけだな」

確かにフィードの言った通り、できるやつがやれることをするべきだという考えはレオードにもある。しかし、比較的身分への差別が少ないこのセントールでもやはり格差が存在し、中階層、上階層の人間に比べれば下町の人々は魔術師や傭兵などといったものに依頼を頼む余裕がない。そのため、何か事件が起こったとしても自衛が基本になってしまう。

もつとも、どうしても手に負えないような事件が起これば騎士団や魔術師団に依頼を出すのだが、彼らも下町の人々だけしか被害が出ていないうちは中々動こうとはしないのだ。中階層、上階層に被害が出てようやく動き出すといった感じである。

だからこそ、今ではすっかりこの下町に馴染んだフィードたちが初めて下町で起こった事件を手伝い解決した時、何も金銭などを要求しなかったときはこの町の誰もが疑ってしまった。元よりよそ者しかも亡益国と揶揄されるこの国に腕の立つものが現れたら警戒しない方がおかしい。きっと彼らもどこかの国で何か事件を起こし、亡命してきたのだろうと誰もが思ったのだ。

「ん？ どうしたの、そんなにじつと俺の事見て」

見たところまだ二十にもなっていないなさそうな容貌をしているのに、どこか激戦をくぐり抜けてきたような貫禄も感じる。本人は何も言わないが、やはり訳ありなのだろうとレオードは勝手に考える。

「いや、特に何も無い。いいからお前はさっさと仕事を選んで出て行きやがれ」

ぶつきらぼうに言うが、仕事を紹介し、フィードを無理矢理追出す事もないレオードは彼に信頼を寄せているからだろう。

「それじゃあ、こいつを貰ってくよ。任務成功したら報酬を町長から貰っておいてくれよ。それじゃあ、またな」

「二度と来るな、このくそつたれが」

ひらひらと羊皮紙をはためかせ、フィードは酒場を後にした。そんな彼の背を見送りながらレオードは残った羊皮紙を片付ける。そして、それらに一通り目を通したところで気がついた。

「まったく、あの野郎。なんだかんだ言って一番面倒な仕事を持って

行ったじゃねえか。本当に素直じゃないやつだ)

数枚あった仕事の依頼でフィードが持って行ったのは今下町を一番騒がせている事件、盗賊による被害防止の依頼だった。

情けない主

酒場を出たフィードは羊皮紙を上着のポケットに仕舞い、下町をぐるりと周り始めた。

先ほど見た羊皮紙にはここ数日下町を騒がせている盗賊による金品の盗難被害について書かれていた。娯楽や刺激の少ない下町ではちよつとした事件でさえすぐに噂になる。盗賊が現れたとなり、しかもその事件が連続で何件も起こつたとすれば下町にいる人間の誰もが今ではこの事件について知っていた。

自分が被害に遭わなければ他人のちよつとした不幸なんてものは他の者にとつては話の種にしかない。そのはずだったが、それも昨日の事件によつて少々事情が変わつた。

昨晩下町の外れにある民家に盗賊が侵入し、侵入した盗賊に気がついた民家の家主が逃げようとしたところを後ろから切られて殺されたのだ。これまでは家主のいない時間帯を狙つて金品を奪つていた盗賊だったが、ここに来てボロが出た。

そもそも、夜盗のような盗賊ならまだしも、自警団や騎士団がいる都市部で盗賊など滅多に見かけないはずなのだ。地形に詳しくなければ、すぐに足がつかし、下町などの金品を奪つたところでその金額などたかが知れている。しかも殺人を犯してしまつてはいよいよ追いつめられてしまつたといえるだろう。これ以上被害が広がるようならさすがに騎士団といえど動かざるを得ないだろう。

しかし、騎士団を動かすとすると、それこそ隊によっては法外な金額の謝礼を請求される事もあるため、そうなる前に事件を解決し

ようとフィードは依頼を受けたという事である。

事件のせいか、普段に比べて露天も少なく、人通りもまばらだ。大人はもとより、子供の姿など見つける方が難しい。

「困ったな。事件について話を色々聞きたかったんだけど、こつも人がいないんじゃない」

今更先ほどの酒場に集まっている人に話を聞いておけばよかつた
と後悔するフィード。とはいっても彼らを追い出したのは彼自身な
ので自業自得なのだが……。

と、きよろきよろと辺りを見回していると、ドンと軽い衝撃がフ
ィードの腰元に響いた。

「おっ？」

よく見ると小さな子供が勢いよく走り抜けた際にフィードにぶつ
かつたようだ。普通の人ならばそのように見えただろう。しかし…
…。

「ほー。俺から金を盗むとはいいい度胸をしてるじゃねーか」

いつの間にか腰に付けていた硬貨袋がなくなっている事に気がつ
いたフィードは走り去る少年の背を見つめながら呟く。その表情に
いつものような笑顔はなく、どこまでも冷めきった表情が浮かんで
おり、彼の横をすれ違つ者は道をあけるほどの不気味さだった。

「世の中を舐めてると痛い目を見るってことを俺が教えてやるとす
るか」

そうしてフィードは少年の背を勢いよく追いかけて始めた。

日が沈み始め、外に出ていた露天が店じまいを始めた頃、路地裏の一角で木箱に腰を預けて息を切らしていた一人の青年がいた。

「く、くそ。あの糞ガキ共。手加減してやっていれば調子に乗りやがって……」

空を仰ぎ、息を整えながら負け惜しみの言葉を吐き出すフィード。そう、結果だけ言ってしまうれば彼は結局金を盗まれたままだった。

あの後、金を奪った少年を追いかけたフィードは行く先々で少年の仲間と思われる別の少年少女たちの妨害工作にあった。時には積み重なった木箱を倒され道を塞いだり、糞の入った小樽を投げつけてきたり、妨害工作に失敗して怪我をしたと思った少女に慌てて声をかけたらナイフで胸元を狙われたりした。最後は正直胸元を擦って危なかったが、それ以外はどうか切り抜けていた。

しかし、途中で少年少女が多数入り混じったせいか、誰が硬貨袋を持っているのかわからなくなってしまい、結局取り逃がす事になってしまった。

「しまったな……ガキだと思って油断しすぎた。こんなことがアルに知れたらまた文句を言われるに違いない」

名目上は自分の奴隷である白髪の少女のことを思い出し、フィードの気分は一気に下降した。たださえ毎日小言を言われてうんざりしているのに今回の件がしれたら余計に小言が酷くなるというこ

とが用意に想像できたからだった。

仕方なくもう一度少年たちを捜しに行こうと木箱から腰を上げて前を見てフィードはようやく気づいた。自分の前方にフードをかぶった見慣れた少女がいるということに。

人目を引く赤色の眼にフードに隠れきれない部分からはみ出す白髪。アルビノと呼ばれる種の少女がそこには立っていた。

「さて、さつきからぶつぶつと独り言を呟くマスターに私はどう反応したらいいかわからなかったので、こうしてずっと待たせてもらいましたが、私に知られるとマズい話でもあるんですか？ マスター」

突然の少女の登場に動揺を隠せないフィード。少女のこめかみにはうっすらと筋が張っている。

「よ、ようアル。こんなところで会うなんて奇遇だな」

「奇遇なんて白々しいですよマスター。私に食材の買い出しを頼んだのマスターじゃないですか。酒場に行っているって聞いていたので行ってみればレオードさんにマスターはとっくに出て行ったと言われましたし、荷物を置いて探しに出てみればこんなところで倒れ込んでますし、なにやら私に知られたら行けないような事をまた起こしてるみたいですし。一体今度はなにをやらかしたんですか」

「今度はって……毎回何か起こしているようにいっんじゃねーよ」

「マスターが動いて何もなかった事の方が少ないんですからしょうがないじゃないですか。私のときだって……」

「そう言われてもな……実際降り掛かる火の粉を払ってるだけだし」
「そういうことしてるから厄介ごとに巻き込まれるんですよ」

ため息を吐き、アルはフィードの横に近づいた。そして、

「それで、結局今回は何をしたんですか。マスターが色々な面で駄目な人だと言う事は今まで一緒に行動してきてもうわかっていますから、早く言った方がマスターのためですよ」

身を乗り出し、問いつめるアルにフィードはとうとう根負けして、

「いや、実はな……」

と先ほど起こった事を説明しだした。

「ハア。もうホントに私のマスターはどうしようもないです。本当に駄目駄目です。何でこんなのが私のマスターなんでしょう。いつその事私がマスターになりたいくらいです」

アルと合流したフィードは下宿先である宿に帰り、一階の食事場で食事をとっていた。

「まあ、まあ。アルちゃんもその辺にしておきなよ。フィードさんだって悪気があっってお金を奪われたわけじゃないんだから」

温かな湯気の立つ野菜スープを運びながら中年の女性がアルに口を挟む。

「それは当たり前ですグリーンさん。悪気があつてお金を盗られるなんてことがあつたら最悪です」

グリーンと呼ばれた中年の女性はそんなアルに苦笑しながらフィードとアルの前にスープを置いた。

「でもアルちゃんはフィードさんに養ってもらっているんだろう？
だったら文句を言っちゃ行けないよ。こういった時に助け合つのが家族つてもんじゃないのかい？」

グリーンは背中まである長いくせ毛をなびかせて言う。アルもグリンの言っていることは内心理解しているからか、つい口ごもってしまった。

と、ここまで来てようやくそれまで黙っていた話の当事者が話しだした。

「本当に悪かつたな、アル。それとグリーンさんもなんだかすいません。気を使わせたみたいで」

「いいんだよ。あんたが悪い奴じゃないってことは今までの下町での活躍を見てればわかるからね。それにアルちゃんのことも。あたしは奴隷にこれだけコケにされる主人つても見たことなかったしね」

グリンのその言葉にフィードは苦笑いを浮かべるしかなかった。

「それで、お金の事はともかく、今回の依頼つて言うのはやっぱりあれかい？」

フィードが酒場を通じて下町のやつかいな依頼を受けている事を知っているグリーンは気になっていたことを尋ねた。

「ええ。おそらくグリーンさんの想像している通りです。盗賊の被害の防止、もしくは盗賊の捕縛ですよ」

「やっぱりそうなんだねー。ここ最近この辺りもその件で騒がしくなっていたし、昨日なんて死人が出たらしいからね。そろそろ依頼が出る頃だろうと思ったよ。うちの騎士団は下町の為になんて動いちゃくれないし。ここがフラムだったら話は違っただろうけどね」

フラムという名前を聞いて一瞬フィードの表情に影が差した。しかし、それに二人が気がつく前にいつもの表情に戻ったため、誰もフィードの変化に気づく事はなかった。

「そうですね。フラムなら騎士団は身分など関係なく誰にでも助けの手を差し伸べますからね。一番治安がいい国も実際あそこですし」

「そうみたいだねえ。特にここ最近出てきた何番隊だったかの副隊長さん。たしかリオーネとかいったかしら。女性なのに他の隊の隊長と変わらないくらい強いみたいだね。しかも、あたしたちみたいな下町の人にも救いの手を何度も差し伸べてくれていたみたいだし。本当にあんな人がうちの国にもいてくれたらいいんだけどね」

「そうですね。まあ、彼女みたいな人の代わりにならないかもしれないうすけれど、俺も頑張らせてもらいますよ」

「せいぜい稼いできてもらうよ。お金をなくしたからって家賃を見逃すほどあたしは甘くないよ」

「依頼を早いとここなさないとな」と気を落とすフィード。アルはその横でのんびりと野菜スープを口にしていた。

一日の始まり

翌日、いつものようにベッドの上で目が覚めたフィードは違和感を感じていた。そして、その理由はすぐにわかった。

「おい、アル。お前俺のベッドに入るなって何度も言ってるだろうが」

上半身を起き上がらせたフィードのすぐ横には、寒そうに身体を震わせてベッドの上で丸まっているアルの姿あった。

「マスター、寒いです。早く毛布をかけてください」

一ミリも身を動かすことなく、アルは言う。

「あのなあ、わざわざお前のためにもう一つベッドを用意してあるのになんで毎回毎回俺の方のベッドに入ってくるんだよ」

ベッドから降り、フィードはグリーンによって洗われて綺麗になった赤色の上着を羽織る。その際、アルの身体に毛布を覆い被せて寒くないようにした。

「それじゃあ、俺は今日も盗賊の方の事件を調べて来るから、お前は大人しくグリーンさんの言う事を聞いておけよ」

それだけを言い残してフィードは部屋を出て行った。

ボタンと扉の閉まる音が聞こえ、しばらくしてアルは毛布を身体から剥がして起き上がった。元々アルにとってフィードと共にいる

事自体に意味があるのであって、フィードがいなくなってしまうって
はベッドにいる意味もないのだ。

フィードとアルの関係は少々、というよりかなり特殊だ。

一般的には奴隷と主人という関係なのだが、実際に彼らが話して
いる姿を見て、すぐにそうだと気がつく人は少ない。

そもそも、奴隷というのは主人に思考、言動、最終的には命まで
も握られている状態である。奴隷の主人は彼らの命を金で買ってい
るのだ。主人が気に入らないと判断して奴隷の身体に刻まれている
烙印に命じればその命を絶つことなんてことは訳もない。

そのため、一般的な奴隷は主人の顔色を伺い、媚びへつらってい
る者が多い。もちろん例外はあるが、アルとフィードはその中でも
また例外中の例外だろう。昨日の一件でもそうだが奴隷が主人を罵
倒するなど特殊な趣味があるもの以外では普通あり得ないからだ。

かといって、アルがフィードに対して常日頃そのような態度であ
るかというところでもない。普段はフィードがアルに対してふざけ
た態度を取っているためアルの態度も必然冷たいものになるのだが、
荒事などの際はフィードは普段から想像もできな程真面目な態度を
とるようになる。そのときはアルもふざけた態度を取る事もなく、
いつもとは違った対応を見せるのだ。

しかし、そんな事態はそこまで多くないので、結局冷たい態度で
フィードに接する事が多くなってしまいうアルであった。

(全く、私があなただの傍にいないと眠れない理由をもう少し考えて
くれてもいいと思うんですが。いえ、これは私のわがままですね。
奴隷の身分で十分な衣食住を提供してもらって、その上言論の自由

まで。

……思えばマスターに何かを強要されたり抑圧されたことなんて今まで一度もありませんでしたね。本人も便宜上奴隷という立場になっただけで言っただけです（

かつてフィードに奴隷という立場から解放され、その後自ら望んで彼の旅に同行するようになってはや数ヶ月が経った。

普段からキツイ物言いをし、冷たい態度を貫き、外敵から身を守っているがその実信頼できる相手がいないからそのような態度になっただけだ。アルは自覚していた。だからこそ、今アルが一番信頼できる自分の主、フィードの傍に一緒にいるときは離れないようにしているのだ。

また、無自覚、自覚があるかどうかは別として、アルは常にフィードの姿を目で追っている。もっともアルのその行動にフィードが気がついていてどうかはわからないが。

アルもまた羽毛でできた温かな上着を羽織ると、部屋の換気をするために窓を開け放つ。部屋の床に溜まったホコリがふわりと宙に舞い上がり、外の新鮮な空気と入れ替わっていく。

アルは急に舞い上がったホコリにコンと少し咳き込み、口元を押さえながら部屋を出た。

（しばらくは窓を開けて換気をしておきましょう。だいぶ中の空気が淀んでいましたから）

そうしてアルは宿の二階に存在する自分たちの部屋を後にして一階の食事場に降りて行った。

「おや、アルちゃん。今日は少し遅めの起床だね。フィードさんはもう出かけちゃったよ」

宿に泊まっている他のお客が食べた食事を片付けながらグリーンが明るい笑顔とともにアルに声をかけた。

「おはようございます、グリーンさん。マスターが出かけた事なら知っています。今日も……置いて行かれたので」

しょんぼりと肩を落しながらアルは答える。その言葉はアルの奇抜な容姿と、親に見放されて落ち込む子供のような姿とのギャップからグリーンやその場にいた者の母性本能を激しくくすぐった。

「もう、あたしがこの子の親なら絶対に置いて行ったりなんてしないのね！ フィードさんも色々と考えてアルちゃんをここに置いて行っているんだろうけど、まったくこれじゃあこの子がかわいそうだよ。安心おし、今日フィードさんが帰ってきたらあたしが一言言っておいてあげるから」

そうだ、そうだ！ と周りにいる宿泊客も同意の声を上げる。もっとも彼らの中でフィードの顔を知っている者はほとんどいないし、アルが奴隷だと知っているものもグリーン以外にはいない。変わった容姿をした異国人とその保護者である旅人とぐらいの知識しかないのだ。

そのせいか、フィードによく宿に置き去りにされてグリンの仕事の手伝いをしていたアルはその容姿とフィード以外には余り話さない事から自然と寡黙で変わった容姿の可愛らしい少女と周りの人間から評価をくだされていたのだ。

そして、一度決まった評価というのは中々変わるものではなく、宿に長い間滞在しているという事もあって、宿に泊まりにきた客や

食事を取りにきた客からアルは新しく入った住み込みの可愛らしい少女と認識され、いつの間にかこの宿の看板娘としての地位を確立しつつあったのだった。

「グリーンさん、どうもありがとうございます。それで今日は何を手伝えればいいんですか？」

ペコリと腰を曲げてグリーンにお礼を言うアル。この宿に滞在して、もうそれなりに月日が経とうとしている。その際、フィードに置いて行かれる事の方が多かったアルは自主的にグリーンの手伝いを始めたのだった。

最初はお客にそんな事はさせられないと断っていたグリーンだったが、フィードもアルのやる事がないとわかっていたため、料理などを覚えさせるという理由でグリーンにアルの手伝いを認めてほしいと頼んだのだ。

結局、二人のお願いに根負けしたのか、グリーンはアルの手伝いを認める事にしたのだった。

「そうだね。ひとまず料理の材料が朝に使って少し足りなくなってきたから買い出しに行ってもらえるかい？ その後の指示は帰ってからまたするから」

「わかりました。それでは買い出しに行ってきます」

カウンターの隅に置いてあるメモが書かれた用紙をグリーンはアルに手渡すと、そのまま他のお客の料理を作り、厨房へと引っ込んでしまった。

アルは受け取った紙に書かれた内容をじっくりと見て、それを片手で握りしめたまま上着についているフードを深くかぶる。

（必要なのは鳥の胸肉とあとは玉葱、それからジャガイモですね。
これなら一度の買い出しで済みそうです）

アルは必要な食材を記憶し、メモを空いているポケットに入れ、
カウンターの中に入り、置いてあった買い出し用の硬貨袋を持ち、
宿を出ていったのだった。

買い出し

外に出るといつもより遅い時間に起きたせいか、多くの人が道を行き交っていた。露天に商品を並べ、商品を売り込むために声を張り上げる店員や、子馬に荷物を引かせる郵送屋、それらを眺めながら何を買おうかと悩んでいる一般人。多種多様な人々がいた。

日中という事もあってアルがフードをかぶっていても特に誰も不審に思う事はなかった。これが小汚い上着であれば物乞いなどと勘違いして怪しまれたかもしれないが、フィードに買ってもらった綺麗な上着で特に汚す事もなく大切に扱っていたので新品と遜色ない綺麗さを保っていた。

もちろん、それだけが不審に思われない理由ではない。最近セントールには厳しい日射しが照りつけており、一足早い夏季が訪れているのではないかと人々の間で噂になっていた。そのため、アル以外にも上着に付けられているフードをかぶる人や、藁で編まれた帽子をかぶる人、他にも日陰で休む人の姿も数多く見受けられる。これが実質アルが疑われない理由の大半だろう。

大勢の人波をかき分けながらアルはいつもグリーンが肉を仕入れている精肉店へと歩いて行った。

「あ、あの。鳥の胸肉を……くれませんか」

精肉店についたアルはいつものフィードに話しかけているような毅然とした態度ではなく、下手をすれば町の雑多が鳴らす音にかき消されてしまうほど小さくか細い声で店主に話しかけた。

「ん？ なんだい嬢ちゃん。買い物か？ 鳥の胸肉が欲しいのか、いくつだい？」

店主はアルに向かってできるだけ優しく声をかけた。少年少女のお使いに慣れているのか、どこか相手を気遣った話し方は淀みない。

「えっと……これくらいなんですけど」

アルは持っていたメモ用紙を店主に見せた。店主はそれを見ると、

「おや？ もしかしてあんたグリーンさんのところにいる嬢ちゃんかい？」

思いがけない店主の言葉にアルは少し面食らった。

「はい、そうですけど……」

自分の知らない相手が自分の事を知っているという事実にはアルは警戒心を抱いて身構えた。しかし、そんなアルを見て店主はケラケラと笑い声を上げる。

「いやいや、そんな警戒しなくても大丈夫だよ。実は少し前にグリーンさんの所に食事をしに行った時に君の事を見かけてね。噂の可愛らしいお嬢さんがどれほどか確かめに行こうって友人に誘われて行ったのだけだね。」

そうしたら見かけない白髪の小さな子供がたどたく料理を運んでいる。しかもそんじょそこらじゃお目にかかれなような可愛らしさときた。

それに、後から聞いた話じゃ君の保護者はそのフィードだっというじゃないか。実は前に荷物の護衛を彼に頼んでトリアの方の村に

行った事があつてね。その時野盗に襲われたんだが、彼は難なくそれを追い払つてね。あれは見ていて気持ちのいいものだったな。まあ、そう言った訳で私は少々君たちの事を知ってるんだよ。もつともそれは私だけに限らず下町の人間の大半はもう彼の事を知っているとと思うよ。良くも悪くも彼は目立つからね」

長々と続ける店主の話に一度も口を挟む事をなくアルは黙って聞いていた。確かに、フィードが荷物の輸送の護衛をするといつて数日アルの元を離れた事はこれまで何度もあつたため、店主の話は信用できる。問題はそんな事よりも自分とフィードが自分たちが思っている以上に下町の人間に覚えられているという事だった。

「そんなに私たちは有名なのですか？」

「そうだねえ。ただでさえこの下町というところに住んでいる人々は刺激に飢えているからね。ちょっとした話題でさえここじゃすぐに広まるよ。それにさっきも言ったけれど、君たちは良くも悪くも目立つからね……」

良い方はともかく、悪い方で目立つのは願ひ下げたいのだが、その悪い方で目立っているのは少なくともアルではないため、今すぐにはどうすることもできないのだった。

「ありがとうございます。以後気をつけるように言っておきます」

店主が用意した肉の入った包みを受け取り、代金を支払う際にアルはそう伝える。店主は何の事だか分からないのか首を傾げていた。

その後も残りの材料を買う時に、店員や店主から「グリーンさんの所のかわいいお嬢さん」と言われ、じろじろと眺められ、果てはフ

ードを取られて頭を撫でられる始末だ。さすがに、それについては怒ったアルだったが、怒り方も強く言えないため、黙ったままじつと不満げに相手を睨みつけるだけになり、結局それもまたかわいいと評される要因の一つになるのだった。

「はあ、ただ買い出しに出かけたただけなのに疲れました……」

両手いっぱいになった買い出し品を抱えながらアルはグリンの元へと向かっていた。道中で何度か見知らぬ人々に声をかけられて困ったが、特に何かをされる訳でもなかったので、よかったのだが。

「そもそも、みんな私が奴隷だって事知らないからあんな風に気軽に声をかけてくれるんですね」

自分の肩に刻まれている烙印を一瞥してアルは独り言を呟く。

「実際に知っていても普通にしてくれるグリンさんはきっと珍しい人なんですよね。あれを普通だと思いたいのには私の希望でしょうし」

実際、このセントールに来てから、今までのように外見で差別されるような事は余りなかった。物珍しそうに皆に見られるのは変わらないが、それで気味悪がられたりすることはほとんどない。他国との貿易をしているこの国だからこそ、アルのような変わり種の間を見る機会は少くないのだろう。

しかし、奴隷となるとまた扱いは変わって来る。アルを最初に買った主とまではいかないものの、少なくとも今のアルとフィードのような関係性は見られない。奴隷は主人を立て、彼らの言う事に従順でなければならない。

そして、彼らに対する一般人の対応もまた粗雑だ。奴隷が粗相をし、それが気に入らなければ乱暴な扱いを受けて当たり前。もちろん、奴隷は主の所有物なのでそれで怪我をした場合は主にそれ相応の金を支払わなければならないが、結局全て金で解決できてしまう。

(……やっぱりこの世界はお金が全てなんでしょうか)

そう思い、すぐさま否定をする。それは彼女自身を助け、面倒を見てくれているフィードに対する侮辱だ。

アルは彼の屈託のない子供のような明るい表情を思い出し、

(とはいっても私たちの場合はマスターに面倒を見てもらっているのか、私が見ているのかどっちなのかわかりませんが)

やれやれと思っていると、気が逸れていたせいか、前を歩く子供にぶつかってしまった。

「うわっ！」

「あっ……」

帽子をアルと同じようにフードをかぶっていた少年が持っていた硬貨袋を落とし、アルも持っていた材料を地面に落としてしまう。

すぐに落ちた材料を拾う。幸い、材料は包みに包まれていたため、汚れずにすんだ。そして、アルの足下に落ちた相手の硬貨袋を拾って手渡そうとして気づく。

(これ……マスターの硬貨袋)

フィードがこれまで使っていた硬貨袋がアルの手元にあった。普

通の硬貨袋であれば気づかなかつたが、アルは何度かフィードから買い出しを頼まれてこの硬貨袋を使った事があつたのだ。そして、それがフィードのだと気づく決定的な要因となつたのは、一度袋の底が抜けた時にアルが縫つて直した痕が残っていたからだ。

自分で縫つたものを忘れるほどアルも子供ではない。おそらく、この少年が昨日フィードから硬貨袋を盗んだ少年なのだろう。

そう理解するとアルは手にした硬貨袋をギュツと握りしめて目の前にいる少年を睨みつけた。少年の方もアルが硬貨袋に関して何か気づいたと悟つたのか、徐々に距離を取り、恨めし気に一瞥するとその場から逃げ出してしまった。

「まっ……」

静止の言葉をかける間もなく少年の姿はその場から消えた。アルは手にした硬貨袋と材料を何度も見て、何事もなくすんでよかつたと今更安堵のため息を吐くのだった。

（マスターの硬貨袋も戻ってきましたし、これで今月の家賃も払えそうです。本当に世話が焼けます。この事を話したらマスターの事ですからきつと褒めてくれますよね……）

フィードに優しく褒められることを想像すると自然と緩む頬を抑える事ができず、終始笑顔のままアルはグリンの元へと歩いて行くのだった。

下調べ

アルが買い出しを終え、グリンの元に向かっている頃、フィードは下町での聞き込みを行っていた。一昨日まで連続で起こっていた盗賊の犯行は何故か昨日は起こらなかった。

「あれじゃねえか。人を殺してビビっちまうような小心者だったんだろ。実際盗られたものもそこまで高価なものじゃないって聞けぞ。だいたいこんな下町にそんな高価な金品があるわけねーだろうが」

けだるげに答えるのはフィードより頭一つ低い青年。栗色の髪に緑色の瞳。年はもう20を超えているのだが、身長が同年代の者に比べて低いのが目下の彼の悩みであった。

「そう思うか？ でも昨日はたまたま現れなかっただけかもしれないだろ。そうやって油断させておいてっていう手かもしれないと思うぞクルス」

クルスと呼ばれた青年は頭をかき、まじめに考えようとするがどうにも落ち着かない。彼はこのように考えるよりも身体を動かす作業の方が得意なのだ。

「まあ、そうかもしれないけどよ。第一なんだってここなんだ？ そりゃ、フラムでやるよりかセントールみたいな貿易国での盗みの方がリスクも低いし、やりやすいかもしれないけどよ。わざわざ都市部に来なくてフラムの端にあるような村に盗みに入った方がもっと金も入るしらくだと思っただけだな」

と、一般人にあるまじき過激な発言をするクルス。こんな事を言

っているが、実際彼は盗みを働いた事など一度もない。本人曰く言うだけなら自由という考えに基づいての事だった。

「確かにな。それとも、ここじゃないといけない何かがあったのかもしれないってことも」

口元に手を置き、フィードは熟考する。そもそも、ここ最近特に大きな事件のなかった下町で何故急に盗賊が出るようになったのか、それが問題だ。一番に考えられるのは亡命者の存在。この国が他国からの亡命者を暗黙の了解で受け入れているのは周知の事実だ。事情を知らない亡命者が金品欲しさから金を盗み逃げ回っているというのが現状一番考えられる線だろう。

しかし、どうにも腑に落ちない。そもそも亡命をするなら余程の事がない限り事前に下準備をして来る場合が多いはずだ。他国の権力者で、その存在が高位であればあるほどこの国の権力者への根回しをしているはずだからだ。

それに、それほどの権力者でもただの富裕層であるのならば、まづ盗みになど入らない。それは彼らの持つ意味のないプライドが大抵の場合は障害になり、行動に移せないし、人を殺した場合は後ろ盾がないので良心の呵責と罪悪感から普通にしていられないからだ。

となると、この場合は権力者であるかどうかは置いておいて、金銭に余裕がなく、事前に計画をしてなく突発的な結果から亡命する事になった亡命者でそれなりに頭も回る相手だと考えた方がいいだろう。

相手の頭が回るとフィードが考えたのはそれなりに日数が経ち、毎日犯行を行っているにもかかわらず、相手の特徴が少しも分かっているという現状を鑑みての事だった。

「これはだいぶめんどくさそうだな」

事態が思った以上荷厄介であるという事にようやく気がついたフ
イードは思わず愚痴をこぼした。

「おいおい、しつかりしてくれよ。お前にどうにかできない問題だ
つたら俺たちは特に役に立たない騎士団たちに問題解決の要請を
ださなくちゃいけないんだぜ。あいつ等に金を払うくらいだったら
パーツと酒場で飲み食いした方がまだマシだぜ」

両手を大きく広げ、金をばらまく仕草をするクルス。その言葉の
端々に騎士団に対する嫌悪感がにじみ出していた。

「お前も相変わらず騎士団が嫌いなんだな」

思わずフイードは口を挟んだ。

「あつたりまえじゃねーか。あいつらが俺たちにしてくれたことな
んで糞みて なもんだぞ。大雨で街が浸水した時も、俺たちが必死
に土嚢を積んでる中、酒場でただ酒を飲んでいるくらいで、終わっ
てみれば派遣要請をした分の謝礼を寄越せとか、殺人鬼の亡命者が
下町をうろついていた時に要請してみれば、殺人鬼に鉢合わせしてピ
ビって逃げ出す始末。」

それでいて金は要求する。中にはまともな奴もいるけど大半の騎
士隊はそんな奴らばかりだ。これでどうやって好きになれって言う
んだよ」

憤りを隠すことなく、心に溜まっている者を思いつきり吐き出す
クルス。その大きな声に驚いたのか、通りを歩く他の人々はビクリ
と一瞬身を震わせたが、誰も彼を注意することなくその場を立ち去
る。

言葉には出さないが、他の下町の人々も彼と同じような考えなのだろう。

「だからさ、俺たちはお前が来てくれて本当に感謝してるんだよ。腕は立つのに全然金銭を要求したりしねーし。俺たちの事を下に扱ったりしないでいてくれるしさ。なんだかんだ困ってたら助けられるのはお前くらいだよ。

だから俺は今回の件もお前がどうにかしてくれてるって信じてる。それはきつと他の下町の奴らも一緒だ。だから、みんなお前が今までどんな風に生きていたか聞かないし、興味もない」

真つすぐな眼差しでフィードを見据えるクルス。その視線にフィードは自分の視線を交わらせることなく、

「いいのか？ そんな事言っているといざ事が起こった時に後悔するぞ」

「そんなときはおれや下町の奴らの見る目がなかったってことだ。だいたいお前はそんなことしねーよ」

「どこからくるんだ、その根拠は」

肩をすくめてフィードは呆れる。

「強いて言えば……勘？ 他にも理由はあるけどな」

「勘って……一応お前ここの地区の次期町長だろうが。そんなあやふやなもん信じるなよ。で、他の理由って言うのは？」

「色々あるけど、一つあげるならアルちゃんに対するお前の態度だ

な。他人に対してあれだけ優しくできる奴が大それた事件とか起こすわけないだろ。それが奴隷ならなおさら……な」

クルスの思いがけない言葉にフィードの視線が鋭くなる。

「お前、それをどこで……」

しかし、フィードの鋭い視線を飄々と受け流してクルスは答える。

「そりゃ、お前。これだけ長い間この町に滞在してればそれくらいの事は分かる奴の一人や二人出て来るさ。まあ、この事を知ってるのは俺も含めて数人程度だから安心しろって。べつに言いふらしたりしねえからさ」

その言葉の真意を探ろうとしたフィードだが、どうやら言葉通りの意味と受け取ってもいいようだ。自分と一緒にいる以上、周りで起こる騒ぎになるべくアルを巻き込まないように心がけている。グリンの元に預けているのもそう言った考えがあるからだ。だからこそ、今のようにクルスがアルの素性を知って、それが公になったときの彼女への被害はかなりのものになるだろう。

一部の人は理解を示してくれるかもしれないが、ほとんどの人は態度を変えるだろう。まだどの国でも奴隷というものへの差別的扱いは根深く存在しているのだ。

「ならいい。お前を信用する」

「さすがフィード。下町の何でも屋！」

ドンドンと肩を叩くクルスの腕をフィードはうつとうしそつに振り払い、

「それじゃあ、なるべく早く問題を解決するよ。みんな迷惑しているみたいだからな」

「おう、よろしく頼むぜ！」

クルスと別れて再び下町をぶらつくフィード。問題を解決するための糸口はある程度掴んでいた。この手の依頼はフィードにとって初めてではないのだ。

「さて、それじゃあ次の被害が出る前に犯人を捕まえるとするか」

そうしてフィードはある人物を探し始めた。

その相手はフィードが昨日財布を盗まれた少年だった。

捕われたアル

材料をグリンの元に届けたアルは二階に上がる。被っていたフードを脱ぎ、換気するために開けていた窓を閉め、一階に下りる。

一階には焼きたてのパンをバスケットに入れて運ぶグリンの姿があった。

「お使いご苦労様アルちゃん」

労うグリンにアルは、

「いえ、これくらいできて当然です。私ももう『子供』じゃありませんし」

さも当然のように答える。やたらと「子供」という部分を強調しているが、本人は子供扱いされるのがよほど嫌なのだろう。

「そうなの？ せっかくお使いに行ってくれたお礼に焼きたてのクッキーを食べてもらおうと思ったのに……。子供じゃないのならアルちゃんはいらさないわね」

アルが反応する事を分かっているであえてグリンは挑発的な態度をとる。アルは甘いものが好きなのだ。

「そ、そうですね。私は子供じゃないので、そんな……甘いものなんて……」

フィードがこの場にいたのなら「お前なに变な意地張ってるんだ

よ。いつも食べてるだろ」とツツコンであとでアルに怒られているのだが、当の本人は今ここにいないため、話が進まない。

グリーンもアルが甘いものを食べるのが好きだと分かってやっている。元々帰ってきたアルとグリンの二人で食べようと思ってクッキーを焼いていたのだ。ここでアルが意地を張り続けて食べないなんていうことになる、グリーン一人で全て食べるには少々量が多いため、食事を取りにきた宿泊客にサービスとして出す事になってしま

う。
さすがにそれはもったいないかなと思っっているグリーンなので、結局今回はアルが折れることで話は終わるのだ。

そのアルはというと、甘いものを我慢する「大人」というプライドと、好きなものを好きだけ食べたいという「子供」との二つの間で激しく心が揺れ動いていた。

(くっ！ グリンさんは私が甘いものが好きだと知っているはずなのに……。いえ、知っているからこそ、こんな風に意地の悪いことをするのですね)

グリンの精神攻撃に必死に耐えていたアルだったが、厨房にある釜から漂うクッキーの甘い香りを嗅ぎ、とうとう折れてしまった。

「食べます。クッキー食べます……」

自分が必死に強調していた「大人」の面をあっさり覆われて悔しいのか、アルはプルプルと小刻みに肩を震わせていた。

そんなアルの様子が面白いのか、グリーンは口元を抑えて必死に笑いを堪えていた。

「まあまあ、子供は素直が一番だよ、アルちゃん」

そう言つて皿に大量のクッキーを乗せてアルの元へ持つて来る。

「ほら、焼きたてのうちに食べておくれ」

アルは受け取つた皿を手に取り、空いている席に座り、甘く香りのよいクッキーをじつと見つめていた。

（むむむ。これはおいしそうです。クッキーの上につつすらと蜂蜜が塗つてあつて、それが香りを更に引き立てています）

おずおずとクッキーに手を伸ばしてクッキーの一つを掴んだアル。ゆっくりとそれを口元に運び、一口。深く味わうように口にしたクッキーの欠片をよく咀嚼し、原型を失つたそれを飲み込む。

「おいしい。おいしい……です」

一口食べてすぐにアルの表情が変わつた。パツと表情が明るくなり、次から次へとクッキーを手で掴み、口へと運んで行つた。

「おやおや、そんなに急がなくてもクッキーは逃げて行かないよ」

飲み物を取りに厨房の中に入りながら、グリーンがアルに注意する。しかし、アルは食べる事に夢中なのか、グリーンの声が届いていないようだった。

やがて、グリーンが持つてきた飲み物を手渡す頃には皿の上には何も残つていなかった。結構な量、そもそもグリーンとアルの二人で食

べる量だったのだが、結局アル一人で食べてしまった。

グリーンが二人分の飲み物を持ってきた事ようやくアルも二人でクッキーを食べるつもりだったということに気がついたアルは、

「すみません……私、一人で食べちゃいました」

意地汚さからの羞恥や、食べる事に夢中だった姿を晒していた事からか、アルは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「いいんだよ。あれだけ喜んで食べてくれたのなら作ったかいがあったってmondだよ。気にしないでおくれ」

「でも、グリーンさんも一緒に食べるつもりで作ってくれていたのに」

申し訳ないと思っているのか次第に声の小さくなっていくアルに、

「いいんだよ。私の分はなくなっただけどまだ作っていないフィードさんの分が残っているからね」

意地の悪い笑みを浮かべ、グリーンはアルの肩を叩いた。それで、アルもグリンの使用とされている事を理解した。

「はい、マスターには内緒ですね」

親しいものにだけ見せる笑顔でアルは元気よく答えた。女二人だけのお茶会は、穏やかな時間と共に過ぎて行った。

突発的なお茶会を終え、グリーンが厨房の奥で溜まっている洗い物

を片付け、アルは食事場の掃除をしていた。手にした箒で床に溜まったホコリを隅に追いやり、それを一ヶ所に集める。集めたホコリを外に掃き捨てる。

「これで、一段落です」

自分のやる事を終えて満足そうにするアル。外はもう昼を過ぎているせいか、日射しが更にキツくなっていた。澄み渡った青空が真上に広がり、下町の通りを心地よい風邪が吹き抜けていた。

（今日もいい天気です。後はマスターが頑張つて依頼を片付けてくれれば問題ありません）

穏やかな天候とは打って変わつて通りを歩く人の様子はどこかぎこちない。連日の盗賊騒ぎ、特に一昨日の殺人が影響しているのだろう。

と、通りを歩く人々に目を向けていると、アルは視界の端に今朝出会った少年の姿を見つけた。

（あれは……マスターの硬貨袋を持っていた）

少年はじつとこつちを見つめていたが、やがてそっぽを向いて路地裏に向けて歩き出した。

「待って……」

アルは持っていた箒を放り出してすぐさま少年の後を追いかけて始めた。何故、と問われるとアル以外には答えられないだろう。少年がアルを見ていた瞳がどこかもの悲し気で、追いつめられた様子に

見えたからだ。

それはかつてアルが叔母の元で生活していて、盗みを働く直前までしていた様子によく似ていた。だからこそ、アルは少年の事が気になり、何を思う訳でもなく、その背を追いかけたのだった。

日の当たらない路地裏を少年は自分の庭を歩くように進んで行く。アルは少年から離されないようにするので精一杯だ。

異臭のする路地裏。浮浪者が建物に背をもたれている。アルは得体の知れない恐怖と不安から周りに視線を映さないようにして少年の姿だけを追いかけた。

やがて、路地裏の一角にある古ぼけた建物の中に少年は入って行った。

(ここは、どこでしょう。一体私はどこまで来たんでしょう)

少年を追いかける事だけに集中していたせいか、アルは今自分がどこにいるのかもわからなくなってしまった。唯一道を知っている少年は目の前にある建物の中に入ってしまい出てこない。

このままここにいってもしょうがないと悟ったアルは、少年の入って行った建物に入る事に決めた。

ほとんど錆びている扉に手をかけ、静かに扉を開ける。

光の入っていない室内は薄暗くひんやりとした空気が漂っていた。一歩、一歩と足場を確認しながらアルは進んで行く。次第に暗闇に目が慣れてきた。周りを見回すと、どうやらここは酒場の跡地のようだった。

と、不意に部屋の隅で何か動くものをアルは見つけた。先ほどの少年だろうか？ そう思って急いで近づく。

「あ、あの！」

いつもより少しだけ大きな声で話しかけるアル。しかし、そこにいたのは先ほどの少年ではなかった。

重しのついた鎖に繋がれ、涙で頬を濡らしている少年少女がそこにいた。小汚い衣装に身を包み、破れた衣装から見える肌は殴られたのか青くなっていた。その姿を見てアルはゾツとした。

(これは、これは……。市に出される前の奴隷です)

アルはかつての自分の姿と少年少女たちの姿を重ねる。個人所有の奴隷となる前は、彼らは魔法で刻まれた烙印を押されず、買い手が見つかるまではこのように鎖で繋がれて逃げられないようにさせられるのだ。

(しかし、何故こんなところにこんなに多くの奴隷がいるのですか？ これだけ多くの子供がいなくなれば誰か気づくはずなのに)

奴隷自体はこの世界に数多く存在するが、中には奴隷の売り買いを嫌う者もいる。おおっぴらに市場を開く事は品がないとして奴隷を数多く所有する富裕層の間でもあまり好まれていない。そのため、こついつた奴隷を売り買いするのは富裕層の家や隠れた場所で開かれる市に参加するという事になる。

そもそも奴隷とは罪を犯したものを金で引き取って奴隷にしたりする例が普通なのである。敗残兵が奴隷になるという例もあるが、全く何をしていないものを連れ去って奴隷にするのは違法として罰せられる。

しかし、バレなければ何も問題がないことから、無理矢理人

をさらって契約をさせ、自分の奴隷にするということが今までになかったわけではないのだ。

かつてフィードがアルを助けた後にそんな話をしていた。

(少なくとも十人以上の子供がここにいます。これが全員この地で手に入れた奴隷だとするといくら何でも多すぎます。これは絶対に無理矢理連れてきたに違いありません)

見ると、子供たちはアルの姿を見て怯えていた。それは、アルの様子を見て怯えているのではなく、自分を追いつめる相手の仲間だと思い、怯えているのだ。

(どうにかしないといけません。ひとまずここを出て、グリーンさんの所へ戻ってマスターに助けを求めれば……)

そこまで考えて入ってきた扉に戻ろうとした時、アルは扉の前に黒い大きな影ができている事に気がついた。

「あつ……」

明らかに自分よりも力があり、強さを持っている存在にアルは身をすくめた。

「おうおう、どうしたんだいお嬢ちゃん。道に迷ってこんなところまで来たのかい？ 駄目だなあ俺たちに取って大事な商品を見ちゃあ。これは大事な顧客に売るものなんだから……」

恐怖から身体が震え、カチカチと歯が音を鳴らす。

「あ、ああ……」

思い出すのは暗く、狭い地下牢。あの時はそこまで不安も、恐怖もなかった。失うものがなかったから。しかし、今のアルには失いたくない大切な日常があった。

いつも彼女の傍にいて優しい言葉と温かなぬくもりを与えてくれた青年。憎まれ口を叩きながらも一番信頼を寄せて傍にいてほしいと感じ、暗闇からアルを助け出した救世主。居場所を与えてくれた大好きな相手。

だが、今ここに彼の姿はいない。目の前にいるのは帰ってきた暗闇からの使者。

アルに向かって迫る大きな手、それを振り払う勇氣も力もないアルは、ただただその場に立ち尽くすしかなかった。そして、アルを掴んだ男の横にいるもう一人の男の姿が目に入った。

「ふむ、少々暗いですね。これじゃあ、新しく入ってきた商品がどのようなものか見えません。明るくするとしましょう」

そう言つて男は手のひらを上に向けて魔術の詠唱を始めた。

「天を照らす太陽の欠片。その欠片の欠片を我に与えたまえ
フ
レア
」

詠唱が終わると男の手に拳一つ分の大きさの小さな火球が現れた。それは部屋の中を照らし出し、今まで見えなかったものを見えるようにした。

アルを掴んでいるのは無精髭を生やし、獣のような髪をたなびかせる無骨な男。そして、その隣にいて部屋を明るくしているのはフードを被り、眼鏡をかけたどこか栄養不足な感じのする細身の男。

「へえ、アルビノの少女とは珍しいですね」

「ん？　なんだ、こいつだいが変わった容姿だが、やっぱり珍しいのか？」

「ええ、滅多にお目にかかれない突然変異種ですよ。その容姿の珍しさから市場では高値で売れます」

眼鏡を抑え、男が解説をする。

「ほお……そりゃとんだ掘り出しものだ。金の方から俺たちのところにやって来るなんてツイてるな」

「そうですね、どうやってここに辿り着いたのかは分かりませんが、見たところ見た目も綺麗ですし、売り物としてはかなりの良品です」

既に男二人のアルを見る目は物扱いになっていた。二人の頭ではアルがいくらで売れるのかという考えしか、もうないのだろう。

「ゲード様」

と暗闇の奥から新しい声が出た。

「ん？　なんだ、イオか。仕事もしないで、お前はなにをやってるんだ」

暗闇から姿を現したのはアルがずっと追いかけていた少年だった。

「いえ、仕事は今からするつもりです。ですが、契約の確認をと思
いまして」

少年は凜とした姿でガードと呼ばれた無骨な男の前に立っていた。

「おお、そのことか。心配するな、この件が上手くいったらお前を
自由の身にしてやろう。契約どおりにな」

その言葉を聞いて暗く沈んでいた少年の瞳に火が灯る。

「わかりました、その言葉を信じます。では、今から仕事にいきま
す」

「ああ、せいぜい町の奴らの注目をそっちに向けておけよ」

少年はそう言い残して扉から出て行った。ただ、扉を出る直前、
一瞬だけアルに哀れみとも似つかない視線を向けるのだった。

「さて、こいつはどうするか」

「そうですね、ひとまず他の奴隷候補と一緒に鎖につないでおくの
がいいでしょう。どうせ何もできないただの子供でしょうし」

「子供」という言葉を強調されてアルは悔しさから歯を食いしば
った。男の言う通り、アルは一人では何もできない無力な子供だっ
たのだ。

（マスター……マスターッ！……）

足に枷を付けられ、身動きの取れなくなったアルは自分の主に向

けて助けを求める事もできず、祈る事しかできないのだった。

鎮火

下町での少年の探索を続けていたフィードだったが、一向に少年を見つけないでいた。少年の手がかりになりそうな物があれば探査魔術で居場所を見つけられる事もできるのだが、手がかりが一つもない現状では聞き込みと足を使った探索方法以外にない。

気づけば、太陽はもう空に昇りきり、グリンの元を出てから、もうずいぶん時間が経っていた。

（そういえば食事もろくにっていないな。一度グリンさんの所に戻るか）

強くなる日射しに手で影を作って光を遮る。そのままグリンの元へフィードは食事をとりに戻った。

「あら、フィードさんお帰りなさい。成果はあった？」

戻ってきたフィードを笑顔で出迎え、グリンが厨房から声をかける。

「ただいま、グリンさん。成果のほうはあったといえは、あったかな。事件解決の糸口は見えているからもう少し待ってくれればどうにかできると思います」

「そうなのかい、それは頼もしい！ それじゃ、これは私からの激励だよ」

そう言ってグリンが厨房から取り出したのは鶏肉の蒸し焼き、焼

きたてのパン、それからヴィシソワーズだった。フィードはそれらが並べられたカウンターの席に座った。

どれも食欲をそそる香りを漂わせており、フィードの口内で唾液の量が増える。

「これ、いただきますも？」

「もちろん、そのために取っておいたんだから」

軽快な笑みでグリーンが答える。その様子は早くフィードの食べた反応が見たいといったところだ。

「じゃあ、いただきますね」

そう言って、フィードは鶏肉をスプーンで口に運んだ。

「うん、おいしいですよこれ」

いつも通りというありがたみがないように聞こえるが、フィードにはグリンの料理はいつもおいしく食べられて満足のいく物だった。この下町に下宿するようになって最初の頃、フィードは酒場などで食事をとっていたが、グリンの、

『当分の間ここに滞在するつもりなんだろ？ だったら食材さえ用意してもらえればうちで料理を作るよ。もちろん、サービスの一環として普通に料理も出すけどね。ただ、そっちは料理も決まってるし、別で料金を取るよ。さあ、どうするんだい？』

と、ありがたい提案をしてもらってからというものの、食材の買

い出しをしてきてはグリーンに調理してもらっていたのだ。

「そう言えば、アルの姿が見えないんですけど、あいつもう部屋に戻りました?」

いつもなら自分が食事を終えていても、フィードのすぐ横に座って傍を離れようとしないう少女の姿が見当たらず、フィードはなんだか居心地が悪くなっていた。慣れ親しんだ存在がすぐ近くにいてということに当たり前に思っていたせいだろう。

フィードにとって、アルはそれほどまでに傍にいて当たり前の存在になっていた。

(子供の面倒を見るのはこれで二度目だな)

気の強かった、かつての少女の姿を思い出してフィードは知らぬ間に笑みを零していた。一年ほど前に訳あって別れた『彼女』だが、元気になっているのだろうか? そう思ったが、すぐさま自分にはそんな心配をする資格はないと否定する。

……いや、きっと恨まれてるだろうな。

何も話さずに、知人と呼ぶには薄い縁の相手の元に置き去りにして別れた。それまで自分の事を家族のように慕っていた彼女を裏切ったのだ。恨まれない方がおかしいだろう。

その事を考えると胃の辺りが急にドツシリと重みを増し、おいしかったはずの料理が急に味気ない物に変わってしまった。食欲もなくなり、料理を運んでいた手も止まった。

「おやおや、なんだい。アルちゃんの姿がないからって食欲をなく

されちゃ、せつかくおいしい料理の材料を買ってきてくれたアルちゃんがかわいそうだよ」

「あ、この料理アルのやつが買ってきたんですか……」

「そうだよ。だから残すなんて真似をしたらアルちゃんに失礼つてね。それと、さっき部屋の掃除をさせてもらった時に気がついたんだけどね、部屋の机の上にあんたの硬貨袋が置いてあったよ」

グリンの予想外の一言にフィードは思わず座っていた椅子を倒す勢いで立ち上がった。

「それ、本当ですか！」

フィードの反応に面食らったのが、アルは言葉に詰まりながらも、「あ、ああ。ホントだよ。買い出しに出かける前には何も言っていなかったから、出かけた時に拾ったんじゃないのかい。中身もちゃんと入っていたし。見つけてくれたアルちゃんに、きちんとお礼を言うんだよ」

グリンはアルにお礼を言うようにフィードに促すが既にフィードの耳には言葉は届いていなかった。

（アルが俺の硬貨袋を拾った？ しかも中身があったっていうことは相手はまだ金を使っていなかったのか。いや、それはいい。これはチャンスだ。もし硬貨袋を持っていた相手と接触していたのなら、相手はアルと俺の関係を知らない。それなら、アルに手伝ってもらって……）

そう考えたところで、フィードは自分の考えがこれまでの行動と矛盾している事に気がつく。

(ツ！ そうじゃないだろ！ アルはこういった荒事から無関係の場所にいさせるって決めていたはずだ。そのために今まで依頼があっても遠ざけていたんじゃないか。ちょっとの気持ちで首を突っ込ませた結果は『彼女』で懲りたはずだろ)

フィードの並々ならぬ雰囲気を感じたのか、グリーンは黙ってフィードの傍を離れて厨房へと戻っていった。

(しかたない、少し遠回りになるかもしれないが、ひとまずアルに話を聞いてみよう。それにまだ相手と会ったと決まった訳じゃない……)

残った食事を一気に胃の中にかき込み、フィードはその場を後にし、二階にある自室に向かった。

「アル、ちょっといいか？ 聞きたい事があるんだが」

扉を開けながら声をかけるが、室内にはアルの姿は見当たらない。扉を叩きながら「アル、ちょっといいか？ 聞きたい事があるんだが」

(あれ、いないのか？ しかたない、グリーンさんにちょっと聞いてみるか)

再び一階へと降りたフィードは厨房の中にいるグリーンへ声をかけた。

「すみません、グリーンさん。アルの姿が見当たらないんですけど、

どこへ行つたかわかりますか？」

「アルちゃん？　そう言えば、食事場の掃除を頼んでから姿が見当たらないね。……そう言えば、外にゴミを捨てに行つた時、何か見つけたのか箒を放り出して勢いよく走り出したのを見たような……」

グリンの言葉にフィードは背筋が寒くなるのを感じた。

（まさか、アルの奴。一人でなにかしてるんじゃないんだろうな……）

アルがフィードの力になりたいと思つていたことをフィードは以前から気づいていた。

かといってフィードもアルを荒事に巻き込むつもりはなかったのだ、グリンの手伝いをさせるという理由を与えて自分の力になつていると言い聞かせてきた。しかし、アルはどことなく不満げだという事も感じていたのだ。

（頼むぞ、頼むから今回の依頼に巻き込まれてくれるなよ。下手をするとこの件はかなり大事なんだ……）

先ほどから何度も速いテンポで拍動する心臓を掌で抑え、不安を隠そうとする。そして、フィードが不安を抱くのと同時に外から大きな声で、

「おい、盗賊が出たぞ！　今度は家に火を放ちやがった！　誰か水を、水を持ってこい！　このままじゃ他の家にも燃え広がっちゃう」

フィードの不安を更に増大させる声が聞こえてきた。

(つたく、こんな時に……。まさか狙ってやってるんじゃないだろうな。いや、そんなことより今ならまだ盗みに入った奴もそう遠くにいていないはずだ。この犯人が俺の予想通りなら近くにいれば捕まえられるはずだ)

勢い良く宿を飛び出し、フィードは煙の上がる方角へと走り出した。

フィードが現場に着いたときには、既に火の手は高々と上がり、民家一軒を丸々包み込んでいた。燃え盛る炎は隣接する家屋に進行しようとし始めている。

そんな強大な力に必死に抗うように下町の人々は用水路や噴水から汲み上げてきた水を必死に火の中に投げ入れていた。

しかし、それも焼け石に水。火の手は収まるどころか、より一層その強さを増している。

「くそっ！ どうにかなんねえのか。このままじゃ、町中が火の海になっちまう」

緊迫した空気の中、声を張り上げるのは下町でも顔が広く知られているクルス。いつものような調子ものの雰囲気はそこにはなく、今はただ町の危機を乗り越えようと真剣な面持ちだ。

「そうは言ってもクルス、炎は強くなるばかりだし、このままじゃどうにもならねえよ。それに、俺たちもどこかで見切りをつけねえと、いつ巻き込まれるか……」

クルスと同じく消火作業に当たっている男性が声をあげる。彼の

言うとおりに、クルスたちの手ではもうどうしようもできないところまで来ていた。

「なら、このまま黙って見てろっていうのかよ！」

「しょうがねえだろ。それに魔術隊を要請すれば時間はかかるが確実に鎮火作業をしてくれる。応援を要請するしかねえよ」

「要請してもここに来るまで時間がかかるだろうが！」

「じゃあ、俺たちに何かできるのかよ！ 魔術を覚えてるやつはちらほらいても、力が足りないんだよ、俺たちは！」

男の正論にクルスは黙り込んでしまう。彼もわかっているのだ、下町には力がない。それがいくら理不尽であろうとも自分たちより上の存在に見下されようとも、彼らに力を借りるしかないのだと。

消火作業は止めることなく、それでもどうしようもない現実を前に途方にくれる彼らを見て、フィードが静かに呟くのはこの町に来て一度も口にしなかった詠唱。口から零れる言葉とともに、静かに大気が震える。

「大気を漂う数多の液体。その欠片を集め、我に与えたまえ
クア
」

紡ぎだすのは水の魔術。それも、魔術を扱うものならば初歩に習う基礎呪文の一つ。大気中に漂う水分を集め、固める。作られるのは拳一つほどの大きさの水球。

基礎、初歩、というものはその道を極めていくものにとって存外

無下にされがちである。それは、自身が成長するにつれ、その道でできることが増えていくからである。ゆえに最初に覚えたものも、それよりも派手で、効果の高いものが現れると、ついそちらに目がいつてしまう。そのため、どれも中途半端な習得になり、応用が利かない。

しかし、基礎を極めれば、その系統に幅広い応用が利くし、時にはそれから思いもかけない発想が生まれることもある。ゆえに、フールドはどの分野でも基礎を重要視していた。

空中にできた水球に更に魔力を流し込む。見た目は変わらないが、ものすごい勢いで水球は圧縮され密度を高めていた。やがて、圧縮に耐えられなくなり始めた水球がその形を崩そうとしたとき、

「お前ら、そこから離れる！」

いまだ消火作業を続ける人々に向けてフールドは声を張り上げた。そして、宙に浮いていた水球を燃え盛る炎の中へと投げつけた。

その瞬間、轟とすさまじい衝撃と過度の圧縮から開放された水流が一気に弾けた。爆散した水の衝撃によって家屋の一部は吹き飛び、先ほどまで目の前で轟々と燃え盛っていた炎は一瞬にして姿を消した。残されたのは半壊した家屋と、焦げたあとの残った隣家。

いまだ何が起こったか理解できていないのか、周りにいた人々は呆然とその光景を見ていた。次第に何が起こったのか理解し始めたのか、人々の中の一人が声をあげた。

「や、やった！ 火が、火が消えたぞ！」

事情を完全に飲み込めたわけではなかったが、彼らの一番の問題

だった燃え盛る炎の鎮火はなされたのだ。喜ぶ彼らを見て、フィードは一息ついた。

（よし、これで問題は一つ片付いた。あとは……）

衝撃的な出来事を前に呆然としている人々から少し離れた位置で同じように呆けている少年の元へ、フィードは一気に駆けだした。

「なっ！？」

驚く少年。次の言葉を発しようとするが、腕を後ろにねじられ、そのまま地面に押し倒された。

「さて、陽動のつもりでやってたんだろうが前回と今回は派手に動きすぎたな。悪いが知っていることを話してもらおうぞ」

少年の上から冷たい視線で見下ろすフィード。少年は出し抜かれたことが悔しいのか、それとも自分が犯人だとバレルようなうかつな行動をとったことへの後悔からか、歯軋りをし、自分を押さえつけるフィードを睨み付けていた。

自由

「それで、お前の知っていることを話してもらいたいんだが、いつまで黙り続けるつもりだ？」

火事の騒ぎを収める中、民家に火を放った犯人を人知れず捕まえ、捕縛魔術で抑え、人目につかないところに連れてきたフィードが問いかける。

「……」

しかし、相手はフィードと視線を合わそうとせず、それどころか一言も喋ろうとしなかった。

「悪いが、あまりお前に構っている時間はないんだ。暴力に訴えることはしたくないから、なるべく早く話してもらえると助かる。こっちはもう死人も出てるんだ。」

陽動をするってことは人が死ぬよりもお前たちにとって益がある何かを裏でコソコソと行ってるんだろ？ それくらいはもうわかっている。おそらくお前が人を殺していないであろうこともさっきわかった」

フィードの言葉に犯人はビクツと肩を震わせた。表情には驚きと戸惑いが混じっている。

「ど、どうして……あれが私じゃないだなんて」

「まず第一にお前は人を殺すような度胸を持ち合わせていない。俺の初歩魔術程度で呆然とするやつが、人を殺して二日で普通に次の

犯行をするような大胆な精神を持ち合わせていないってことがある。他にもお前みたいな力も、知恵もなさそうな餓鬼にとっさに人を殺せる機転も器量もないってのと、それまで小さな犯行を続けていたのに、急に人を殺すなんて大胆な手を使ったってのもな」

的確に相手の分析をしていくフィードに犯人は意識していない自分ですら暴かれる得体の知れない感覚に吐き気と嫌悪感を覚えた。しかし、圧倒的力量差の相手に捕まえられ、反抗する力もないため、ただにらみつけることしかできなかった。

「おそらくお前は裏で糸を引いているやつからすれば使い捨ての道具のようなものじゃないのか？」

人を殺したのはおそらく盗みを働いたときに相手に顔を見られてそのまま逃げ、それをお前の主人に知られたからだろう。殺したのはもちろんお前じゃないがな」

「……」

「それに、お前そんな格好してるけど女だろ。そうなるとますます信憑性が湧いてくる。お前くらいの年の男ならもう少し力もあるしな」

そう言って少年、もとい少女の胸元に視線を向けるフィード。

「それは脅しか！ 私の身体を貪りたいなら好きにしろ。どうせお前に捕まった時点で私の仕事は失敗したんだ。あとはもう殺されるしかない。けどな、私は最後まであがくぞ。自由になるためなら最後まであがいてみせる！」

瞳に涙を集め、恐怖から必死に震える少女。そんな少女にフィード

ドは近づき、肩に手をかけた。

目を瞑り、今から起こることを想像して今にも吐き出しそうになる少女。嫌悪感が寒気に代わり、背筋をなでた。

ビリッと両肩の布が破れる音がして、とうとう予想していることが起こったと確信する。ああ、今から自分はこの男に犯されるのだと。

目を瞑ったまま、覚悟を決める。いつそのこと舌をかんで死んでしまいたい気持ちだったが、それは彼女の主であるゲードからの命令によつて自害することは不可能になっていた。つまり、このまま慰みものになるしか道はなかった。

(くそ！　こんな男に……)

悔しさと悲しさから、とうとう涙が零れ出た。今までの辛い日々
のことが走馬灯のように一気に脳裏を駆け巡る。

(そもそも、あのゲードに捕まったところから私の人生は終わったんだ。家族のいない私を捕まえて、無理やり奴隷として契約させられて、あれこれときき使われて。

殴られ、蹴られ、死にそうになるくらい空腹になるまで飯を抜かれて。あげくこんな男に捕まって。せつかく今回の仕事が上手くいったら自由になれるはずだったのに。なんで……なんでっ！)

溢れる涙は止まることなく流れ出る。一瞬のことが永遠のようにも感じれて、閉ざされた視界の中、運命の時を今か、今かと苦痛と不安と共に待っていた。

しかし、いつまで経ってもその時はこなかった……。

(…………?)

不思議に思い、薄っすらと目を開くと、少女の肩に刻まれた烙印をじっと見つめるフィードの姿がいた。

「な、なにをしてる。私を犯すならさっさとしろ！」

虚勢を張り、今にも消えそうなほど小さな声でフィードに告げる少女。だが、フィードはそんな彼女の様子がおかしいのか笑っていた。

「何がおかしい！ お前は私を慰み者にするためにわざわざこんなところに連れてきたのだろうか？ なぜ早く私に手を出さない！？ それともお前のモノは不能なのか？」

少女が口にするにはあまりに下品で、今のこの状況では相手の気分を逆なでするだけしかないのに、少女はフィードを罵倒した。しかし、フィードはそれに答えない。文句も言わない。ただ一言。

「なあ、お前は自分がいかにも不幸でこの世の地獄にいるとも思っているだろうが、お前みたいなやつはこの世にごまんといふんだぜ。別に俺がお前より不幸だとか言うつもりもないが、どうせお前自分の主に自由と引き換えに陽動をやれとでもいわれたんだろ」

フィードの的を得た発言に少女は何も言葉が出なかった。それは全て事実だったからだ。

「馬鹿だなあ。そんなに自由になりたかったら何でもっと頭を使わない。さっきも言ったと思うが、お前の主はお前のことを道具とく

らいにしか思っただけなんだぞ。自由にされる前に殺されるっていう考えがでなかったのか？」

あまりにも遠慮のない言葉を投げかけるフィードに少女は眼光を鋭くし、怒りを全身で表した。

（お前に、お前になにがわかる！ こんな辛い仕打ちも知らないで！ 殺されるだって？ そんなことくらいわかってた！ でも、でも希望がない私はそれに縋るしかなかったんだ！）

一度は止まりかけた涙も、またポロポロと地面に落ち始めてしまった。悔しかったのだ、これだけ無遠慮にものを言われることも、それがどうしようもない事実だったことも。

「くそっ！ くそっ！」

ただ、どうしようもなく、少女は泣き続けた。そんな彼女にフィードは容赦なく追い討ちをかける。

「どうして主を殺そうと思わなかった？ そんなことすら思わなかったのか？」

何を馬鹿なことを言うのかと少女は思った。そんなことは今まで幾千、幾万と考えた。しかし、一度でもそれを実行して失敗でもすれば殺されるのは自分だ。

「本当に自由になりたかったのなら、相手に媚へつらつても、自分のプライドがどれだけボロボロになろうと、相手がほんの一瞬油断するくらいの信用を勝ち取るくらいしてみせる。」

それだけで大抵のやつは殺せるんだ。それができなかったのはお

前がそういったことをやる前から諦めてたってことだ。目の前にぶら下げられた自由って餌にだけしがみ付いて考えることを放棄していたお前の罰だ」

「うるさい！ うるさい！ なんでお前にそんなこと言われなきゃならないんだ！ うるさいんだよ、さつきから正論ばかり並べやがって。そんなこと私だってわかってるよ、だからって正論が全部通るのが世の中じゃないだろうが！ それだっただらどうして私はこんなに苦しい思いをしなきゃいけないんだよ！」

少女の悲痛な叫びをフィードはただ黙って聞いていた。

「私だって、私だってな！ もっと自由に生きたいよ。でも、誰も助けてくれない、気づいてくれない。だったらどうやってムリじやないか！ 私一人じゃ、どうあっても自由にはなれないんだよ！」

口から出てくるのはおそらく今まで少女がずっと抱え続けていた心の闇。誰にも話せず、一人で血の涙を流し続けていたのだろう。

「なら、お前は私を助けてくれんのか？ ムリだろそんなこと！ 町にこんなことして、主に命じられたらすぐにでも死んじまう私をお前は助けてくれんのかよ！」

小馬鹿にした笑みで、それでも涙は止まらず、少女はフィードを罵倒し続けた。しかし、とうとう出す言葉もなくなったのか、それとも疲れ果てたのか、少女は黙ってしまった。

「言いたいことは、それで全部か？」

その言葉に少女はうなずく。後悔はしていない。死ぬ前に言いた

いことは全て言い尽くした。

フィードの右手が徐々に少女の顔に近づく。

(ああ、今度こそ本当に終わりだ……)

再び瞼を閉じ、視界を閉ざす。ビクビクと怯えながら、立ちすくむ少女にとつとつ衝撃が来た。

「イタッ！」

しかし、それは予想していたものよりもはるかに小さく、たいして痛みのないものだった。

「馬鹿、お前みたいな餓鬼が人生悟ったようなこといつてんじゃねーよ」

目を開けた先には先ほどまで恐怖の対象であった青年はいなかった。

「今のは俺の金を盗んだ分の仕打ちだ。これだけで済ませてやるんだから感謝しろ。言っておくが町に与えた被害に関することを許しているわけじゃない。それは後々償わせるからな」

未だにフィードが何を言っているのか理解できない少女は、ここに来る前のように呆けていた。

「んじゃ、まあお前を償わせるのは自由にしてからにするか」

自由という言葉に少女が反応する。

「な、なに言っただお前！ そんなことできるわけないだろ！」

奴隷の契約は主の契約解除の承諾と魔術師による解除魔術があつて始めて成立する。いくら凄腕の魔術師でも契約者の承諾がなければ烙印の解除はできないのだ。

「それができるっていったらどうする？」

子供が親に得意なことを自慢するような、笑みを浮かべフィードが尋ねる。

「そ、そんなの。そんなの……」

上手くいくわけない。そう思いながらも、少女の心は揺れていた。自由が手に入れられる。もしかしたら、嘘かもしれないのに、降つて沸いた希望にどうしようもなく少女は揺さぶられるのだった。

「できるはずないって？ いいか、俺はできる。それだけの経験も積んだ、屈辱も絶望も味わってきた。お前みたいに死にたいようなときもあった。でも、俺は諦めずに進んできた。人の助けもその中であつたし、自分で解決したこともあつた。だからさ、諦めんな。そんな簡単にやること全部諦めてたらやれることもやれなくなるぜ」

それだけを言っただけでフィードは詠唱を開始した。

「正しきもの、その存在を認めない。偽りをもって事をなし、偽りをもって騙し、救おう。」

この世界はかくあるべし。虚構こそが真実。真実こそが虚構。偽りの生成、その実を我に与えたまえ。

フィクフォーメーション」

詠唱の終了と共に何か巨大な力が少女の烙印に熱を持って集まった。痛みはある、だが同時に何か重いものが烙印から抜けていくのを感じた。

「これで終わり。お前はもう自由だ」

あつさりと、あまりにもあつさりと自由という言葉を受け渡されて少女は戸惑った。嘘をついているのではないか？ 自分を騙しているのではないかと。しかし、そんなことを目の前のこの男がする意味もなく、今はただ自由という言葉を信じるしかなかった。

「なんで、こんな風にして助けるんだ？ お前さつきはあれだけ偉そうに私に説教してたじゃないか。頭を使え！ 自分で成し遂げろってー！」

「確かにそうは言ったが、あれはあくまで俺の自論だ。別にお前に強制するつもりもない。さっきのは、お前を見ていて昔の俺を見ているみたいで、むかついたから説教みたいになったところはあるけどな」

「じゃあ、なんで私を助けたか理由を言え！ まさか助けてくれて頼んだからとかいうんじゃないだろうな！」

「ま、それも一つの理由ではあるけどな。言っておくけど今の呪文は烙印の契約解除をしたわけじゃない。解除一步手前の状態にしてあるだけだ。契約を偽りの契約で誤魔化してお前の主人からの命令が届かないようにしているだけ。だから、本当に自由になりたいの

ならお前が主人に契約解除を申し付けるしかない」

「なっ!？」

「そのままでも本当に契約解除した状態と変わらないけどな。それでお前が納得するならそれでもいいが、そのままだと結局本当の意味での自由にはなれないぞ。実際に自由になったとしてもまずは償いをさせるところから始めるけど」

「そんなことが私は聞きたいんじゃない!」

「なんだよ? 別に助けてもらったんだからいいだろうが」

「そうだが、そうだが……」

「まあ、今の礼にお前の知っていることは全部話してもらっただけ。でないとその魔術の効果解除するぜ」

脅しの言葉を口にするフィードだが、今の少女にとってそんなものはなんの意味もなかった。

(こいつは、こいつは私が今まで見た人間の中で一番の甘ちゃんでお人よしだ!)

少女が自分のことを裏切ると思っていないのだろう、さっきまでかけていた捕縛魔術はいつの間にか解かれていた。逃げようと思えば逃げられる。実際に逃げれば十中八九捕まえられるが、それでも逃げるという選択肢を用意してくれている。

少女はしばらく黙りこくっていたが、やがて口を開き、

「わかった……お前に全部話す」

しぶしぶといった様子でフィードに答えた。

「ん、了解。それじゃあ早いとこ話してもらおうか。時間が経つと不味い気がするからな。　　っと、その前にお前の名前を聞いておこうか。名前も知らないと不便だからな」

言いつつ少女の頭を撫でるフィード。それはいつも彼の傍にいる少女にしていることだ。背丈も年齢も近そうな少女が目の前にいたせいか、無意識に行ってしまったのだろう。

「……イオだ」

その行動に少女は恥ずかしさからか、先ほどまでとは違った意味で視線を合わせられなくなり、そっぽを向いたままポツリポツリと話を始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9695z/>

アルは今日も旅をする

2012年1月6日04時48分発行